産経新聞　朝刊　和歌山版　2024年4月7日

くじら日記

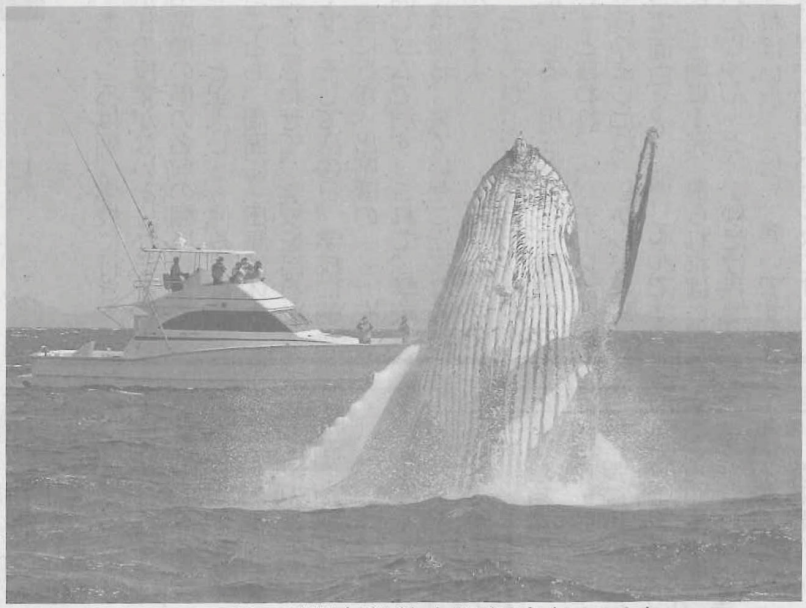
太地町立博物館から

沖縄のホエールウオッチング

自然界で生きるたくましさ

大海原に船を走らせ、船上から海に生きる野生の鯨類を観察することができるホエールウオッチング。日本では、1988（昭和63）年に東京都小笠原村の近海でツアーが開催されて以来、太平洋に面した地域と島を中心に全国的に広がりました。県内そばの海でも、ハクジラ類最大種のマッコウクジラを主な対象としたツアーが、1990年代から始まっています。今年2月、筆者は休暇を利用して、沖縄県近海のホエールウオッチングツアーに参加しました。

午前9時、ホエールウオッチングの船が同県北部の本部港（本部町）を出港しました。30分ほどたったでしょうか。ガイドが数キロ先で、クジラが跳躍したのを発見しました。船はスピードを上げ、その場へと向かいます。たどり着くと、筆者らはデッキに上がり、クジラを探しました。



沖縄県近海で跳躍するザトウクジラとホエールウオッチングの船（沖縄アイランドクルー提供）

波立つ海面に1箇所、直径5メートルほどの鏡面のような滑らかな円がありました。ガイドが「クジラが潜水したときにできる」と説明してくれました。

数分後、少し離れた場所で、2頭のクジラが豪快な噴気を上げながら姿を現しました。「ザトウクジラの親子だね。赤ちゃんは小さいから生まれて間もないね」とガイド。ザトウクジラは、口内にクジラヒゲと呼ばれる特殊な器官をもつヒゲクジラ類のグループに属します。最大体長は14メートルで、頭部のいぼ状の突起や体長の3分の1にも達する長い胸びれが特徴です。ほかの多くのヒゲクジラと同様、夏には高緯度、冬には低緯度に移動し、季節回遊します。ガイドは「沖縄には冬季に、繁殖や出産、子育てのために来遊する」と続けました。

ザトウクジラの親子は短い潜水を繰り返しながらゆっくり北上し、船はクジラとの距離を保ちながら伴走します。ガイドの言葉に耳を傾けながら、巨体の力強い泳ぎや息遣いを肌で感じ、自然界で生きるクジラのたくましさに魅せられたのでした。

1時間ほどたった頃、ガイドが「名残惜しいけど別れようね。親子クジラにストレスがかかるからね」と言い、船のかじが切られました。

ほぼ半日のホエールウオッチングは、地域の自然環境や生態系に配慮しながら、自然環境や野生生物への理解を深めて楽しむエコツーリズムの理念そのものでした。それは、スタッフの熟練した技術や豊富な知識、教育的配慮、クジラへの思いやりがあってこそできるのでしょう。くじらの博物館では、海岸線を利用した自然に近い環境で鯨類を飼育展示しています。野生の鯨類さながら、ありのままに、たくましく生きる姿が見られます。その環境で、飼育員として何ができるのか、改めて考えさせられる旅行となりました。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則、第1日曜日に掲載します。